

学校評価書

総社市立山手小学校
校長 中司 康彦
(公 印 省 略)

1 自己評価

Ⅰ 評価結果 (別紙参照)

Ⅱ 分析・改善方策

1 心プロジェクト

(1) 心豊かな児童の育成

品格教育と関連づけた「特別の教科道德」の授業、月目標・週目標の遵守や振り返りを大切に生徒指導の取組、「よいこと見つけ」の取組などを行った。また、いじめを考える習慣や人権週間に合わせて、人権標語、「きらりカード」、「なかよしの空」等の取組、人権に関する内容の道德の授業等を実施した。そして、11月に「言われて気持ちのよい言葉」や、「言われて嫌な気持ちになる言葉」を全校で考える学級活動を行った。

アンケートでは「思いやりの心が育っている」、「自分の子は友達から優しくされている」についての回答が、昨年度と同様、児童・保護者とも、肯定的意見の割合が非常に高く、昨年度の割合よりさらに高くなった。これは、人権に関する取組やピア・サポートの取組等での児童の様子、充実感、変容等を保護者や地域に学校日より、学年・学級日より等で、定期的に発信したことも理由の一つと考えられる。今後も継続して発信していく。また、「友達に嫌なことを言われたり、嫌なことをされたりしていない」の児童の肯定的意見の割合は昨年度と比べ11%減少した。これは、学校行事等の延期・変更・中止や、日々のコロナ感染症対策の徹底のため、日常生活が制限されて、児童のストレスがたまっていることも原因の一つとして考えられる。人権に関するアンケートでの保護者の肯定的意見の回答の割合が昨年度より3%高くなり、「分からない」と回答した保護者の割合も昨年度より5%減少した。これは、人権に関する取組を「学校日より」等でこまめに発信したこと、全教職員が保護者とこまめに連絡を取り、保護者の不安な気持ちを減らしたことなどが考えられる。

来年度、児童が友達からのサポートを実感できるようにするための「きらりカード」や、「よいこと見つけ」の取組を、より工夫しながら引き続き行っていきたい。また、問題行動や一人ひとりの悩みを早期発見するために、より細やかな児童観察を行ったり、教育相談のやり方を再検討したり、言葉遣いに関するより細やかな指導や学級活動を行ったりなどを、全教職員で取り組んでいきたい。また、コロナ禍でも可能な児童がやる気になる工夫した学年・学級行事を、計画・実施していく。そして、家庭訪問も含め、保護者へのこまめな連絡を徹底したり、人権に関わる学校や学年の取組を、保護者や地域へ発信したりすることにより、人権に配慮した対応についての保護者の肯定的意見の割合を、さらに高くしたいと考える。

(2) 「す・き・だ山手小学校運動」の推進

「あいさつ」については、週目標への設定、教師の率先垂範、児童会や児童のボランティアを中心とする主体的な取組、地域住民の協力等、例年の取組を行った。しかし、マスク着用、大声を抑制する風潮・指導などから、「あいさつ」の声が小さくなったと考えられる。そんな中、今年度から「あいさつ」と「履物」に関する家庭取組表を作成・実施することで、一定の成果を上げることができた。アンケートでは、「あいさつ」、「履物」に関する肯定的回答の割合が、少し改善は見られたものの、児童・教職員と比べ保護者が低かった。これは児童の姿が、学校と家庭とで大きな違いがあるからだと思われる。

来年度、「あいさつ」については、今年度12月に実施した「あいさつ」の意義を登校班の班長に伝えたり、地区ごとに児童に話をしたりする取組を継続して実施していきたい。

「あいさつ」、「履物」の取組について、保護者への周知の徹底と、保護者のより一層の協力が必要となる。心豊かな児童の育成を図る上で、行動の目的や価値をしっかりと伝え、その必要性や重要性を児童が理解し、「学校でも家でも」実践できるようにすることが大切である。そのためにも、全職員が常に意識を高め、共通理解をして指導にあたることがさらなる成果へつながるものと考えられる。

2 学びプロジェクト

(1) 確かな学力の育成

「岡山型学習指導のスタンダード」を基本として、達成状況が分かりやすい「めあて」の研究、「振り返り」の工夫、自分の考えを伝え合う活動を活性化するための「発問」の工夫等により、児童が主体的に取り組む授業を目指して改善を進めてきた。「めあて」、「振り返り」に関するアンケート結果を見ると、教職員の自己評価が非常に高く、全教職員が本年度の研究の方向性を理解し、授業改善に取り組んだことが分かる。そして、今年度も相互授業参観の取組を継続し、教職員各自の授業改善につなげることができた。「わたしは自分の考えを筋道立てて話したり書いたりできるようになっている」では、児童の肯定的な回答の割合が、昨年度

と同様に高く、保護者の肯定的回答の割合も7月実施のアンケート結果より高くなった。その理由は、授業中自分の考えを発表したり書いたりする時間を、意図的・計画的に設けたこと、日記や条件作文、新聞を読んだ感想を書く等の取組を全校を挙げて実施したこと、4～6年生が山手っ子タイムで文章を書いたり、文章を読解して解いたりする問題を行ったことなどが考えられる。また、授業におけるパソコン使用に関する情報交換を研修や日々の中で行った。そして、自主学習に関する校内研修を実施し、全校で統一したやり方を示した。

来年度、授業中、考えを発表する際に、その考えになった理由を言わせる取組は継続していく。また、日記や条件作文、新聞を読んだ感想を書く等の取組も継続していく。そして、自主学習の工夫した取組を継続し、家庭学習時間を増やしていきたいと考える。さらに、6年生は、長いスパンで宿題を出すこと等、中学校生活を見据えた取組も継続していきたい。

(2) 特別支援教育の充実

各学級において特別支援教育の視点を生かした教室環境づくりや授業づくりに取り組むと共に全職員で全児童を支援できるようにするため、各種委員会、終礼等児童の情報を共有する場を設け、共通理解の下に支援してきた。教職員へのアンケートでは、ほとんど肯定的回答で、常に意識をして授業や支援に取り組んできたことが伺える。

今年度も、特別支援学級の担任団が立案・実施した校内研修が行われ、全教職員でユニバーサルデザインの視点を共有化することができた。来年度も、理解や指導を深める工夫をし、話し合い活動を組織化する「共有化」の取組を継続し、「分かる・できる授業」を実践していきたいと考える。

3 元気プロジェクト

(1) 体力づくり

すべてのアンケートについて、児童、教職員とも、肯定的回答が非常に高い。「業間休みに外に出て体を動かしている」では、児童の肯定的な回答が、昨年度より10%高くなっている。体育科の授業では3分間走を実施し、業間休みでは期間を決めた縄跳びを計画的に実施した。しかし、コロナ禍の影響により、業間休みのペース走の中止や、体育の授業でも多くの制約があった。来年度もコロナ禍の制約も視野に入れながら、児童のやる気につなげる取組を継続して行い、児童が楽しく、意欲的に体力づくりができるようにしたいと考える。

(2) 基本的生活習慣の定着と健康作り

メディアコントロール週間に関するアンケートでは、肯定的意見が児童88%、保護者78%という結果で昨年度とほぼ同じ数値であった。メディアコントロール週間中の保健委員会の児童による工夫した広報活動や、担任による学級指導を実施し、総社東中学校区で共通した小学校の取組も行われたことで、児童のめあてを守ろうとする意識が高まったと考える。しかし、前向きに取り組む家庭と、取組が難しい家庭との差を感じている。今後、メディアの利用については、学校での学級指導等で今後も継続的に指導し、児童自らメディアコントロールできる力を育てていくと共に、家庭での一層の協力を得られるよう働きかけの工夫をしていきたいと考える。そして、総社東中学校区で共通した小学校の取組も継続していきたい。

4 地域連携プロジェクト

(1) 開かれた学校づくり

学校便りや学年便り、ホームページで教育活動の様子を発信し、保護者や地域にとって役に立つタイムリーな情報誌やホームページづくりに努めてきた。その結果、アンケートの回答では、保護者の肯定的回答が非常に多く、保護者と学校との信頼関係を構築する役割を果たしている。今後、担当者の負担を考慮しながら、記事の作り方、更新の仕方等を工夫することにより、最新の情報を定期的に届けることができるようにしていきたい。

(2) 学校支援ボランティアを積極的に活用する

今年度、コロナ禍の影響で、学校支援ボランティアに依頼することが、昨年度同様、非常に減少したにも関わらず、アンケートにおける児童・保護者の肯定的回答の割合が高かった。これは、学校支援ボランティアの有効性について、児童・保護者ともに周知されたと考える。

来年度、コロナ感染症の状況を見ながら、取組ごとに学校支援ボランティアの活用を考えていきたい。そして、ボランティアの方々が、より意欲的に取り組むことができるよう、活動する日に校内放送で児童に伝えること、学校だより等に児童の感想や感謝の気持ちを載せること、児童が直接ボランティアの方々と対面し、自分の言葉で感謝の気持ちを伝えること等、実施していきたい。今後も、支えてくれる地域の方々への感謝の思いや、ふるさと山手への愛着の思いが、より高まっていくよう、よりよい方法・やり方を検討・実施していくことで、ふるさとを愛する子どもの育成を図りたい。

学校関係者評価者名

竹田 祥郎 (学識経験者)	尾崎 啓一 (山手公民館 館長)
田中 真秀 (大阪教育大学大学院 特任准教授)	守安 雅美 (主任児童委員)
市村 みみこ (主任児童委員)	劔持 孝明 (山手小PTA会長)
姫井 真澄 (山手小PTA副会長)	

3 学校関係者評価

- 1 心プロジェクト
 - ・学校が楽しと感じていない児童の個別相談に応じる体制を整え、全児童が100%「学校が楽しい」と回答することを目指してほしい。
 - ・「思いやりの心」については、一定の成果があったことを評価する。
 - ・定期的な教育相談のみでなく、日頃から些細なことを教員に話せる環境を、より整えることが必要である。
 - ・「あいさつ」について、全体的に評価が下がっていることから、その原因を探り、「あいさつ」の意義を児童伝え、評価を上げる方法を考えていく必要がある。
- 2 学びプロジェクト
 - ・基礎学力が定着していること、児童の表現する力の向上していることを評価する。今後も児童理解に基づいた授業計画・実践・改善を行ってほしい。
 - ・「書く」ことについては、手をしっかり動かし、実際「書く」ことを行ってほしい。
 - ・1人1台端末を用いた授業を模索し、効果的な授業を行っていることを評価する。
 - ・児童のパソコン使用に関して、児童間で差がつかないように、苦手意識のある子どもに対し、引き続き的確な指導を行ってほしい。
 - ・家庭学習に自主学習ノートを取り入れることで、児童の興味・やる気を引き出していることを評価する。家庭間格差が少しでもなくなるよう、児童の学びの意識を高める取組を継続してほしい。
- 3 元気プロジェクト
 - ・コロナによる制約の中、工夫を凝らし、一定の児童の運動量を確保していることを評価する。
 - ・メディアコントロール週間の各家庭の取組方の差が大きいことから、保護者の意識改善を促す取組や、メディアの長所と短所を児童に考えさせる工夫した取組を考えてほしい。
- 4 地域連携プロジェクト
 - ・各種通信やホームページでの発信は安定的に行っていることを評価する。「お知らせ」によって学校の様子が保護者に伝わり、学校への信頼関係が構築できている。情報は常に新しいことが大切であるため、定期的な更新を意識してほしい。
 - ・教育課程を的確に捉え、前向きに取り組んでいる教職員の姿勢は評価に値し、家庭・地域からの教職員への信頼は増している。
 - ・ボランティアの高齢化や、コロナ禍の状況を考え、活動できる内容を精選し、学習支援を継続してほしい。

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

- 1, 心プロジェクト
 - ・児童が友達からのサポートを実感できるようにするために、「きらりカード」の取組、帰りの会での「よいこと見つけ」の取組、「なかよしの空」の取組、人権に関する道徳の授業や学級活動をより工夫しながら引き続き行っていく。
 - ・教育相談のやり方を再検討するだけでなく、児童が些細なことでも教職員に相談できるように、学級の環境づくりや、教職員からの定期的でタイムリーな声かけ等を実践していく。
 - ・「思いやりのある行動」と「あいさつ」を最重要課題として、児童会活動、学級活動、家庭への呼びかけ等、工夫した取組を実施していく。
 - ・コロナ禍でも可能な児童がやる気になる工夫した学年・学級行事を、計画・実施していく。
- 2, 学びプロジェクト
 - ・授業中、自分の考えを発表する際、その考えになった理由を言わせる取組は継続していく。
 - ・宿題の出し方を工夫することで、家庭学習時間を増やしていく。
 - ・6年生の中学校生活を見据えた取組を継続していく。
 - ・児童に「書く力」をつけるために、日記や条件作文、新聞を読んで感想を書くこと等を、授業や家庭学習で行っていく。
- 3, 元気プロジェクト
 - ・コロナ感染症の状況も考慮に入れながら、児童のやる気につなげるいろいろな工夫を考え、実践していく。
 - ・総社東中学校区で、幼小中連携による減メディアの取組を、改善しながら継続して行っていく。
- 4, 地域連携プロジェクト
 - ・学校支援ボランティアと児童の交流を、コロナ感染症の状況も考慮に入れ、工夫しながら実施していく。

